

---

# 東方維形錄

そのまた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方維形錄

### 【著者名】

NZコード

N6019Y

### 【作者名】 そのまた

### 【あらすじ】

テンプレっぽい転生物、そんなお話

## 1話 転生（前書き）

初投稿です、よろしくお願いいいたします。

## 1話 転生

「…はあ…？」

目が覚めたら、自分は森の中にいた。

「ちょ、ちょっとこれどうこうことだよ！！」

なぜこんな場所にいるのかがわからない、俺は確か…あれ？  
なんと、目が覚める前のことがまったく思い出せない。  
これはまずい、どうしてこうなった！？

「おおおひつけ俺…まずはなぜこんな場所にいるのかを考えなくて  
はー。」

さて、なぜ自分はこのようになるとこりにいるのだろうか？  
何故か目が覚めたときから立っていたし、周りの木々が大きく見える  
るし…

とりあえず冷静になつた俺は辺りを見回す、やつぱり木、下を見る、  
生い茂る草、

「…ふむ、何がなんだかまつたくわからん」

とりあえず自分の体に異常がないかを見てみる。

なんだか小さい手、小さい足、服を着ている、そのぐらいだった。  
…もしかして体が小さくなつてる！？もうわけがわからんね…  
そんなことを考えているといきなり頭痛がした。

『おい、聞こえるか？』

その後すぐに「声が聞こえた、辺りを見回すが誰もいない。

『落ち着け、今からお前に話したいことがある』

話したいこと? とか、俺の頭に話しかけてくれる』『はい』  
『何なんだ?』

『こいつとはなんだ』『こいつとは、私は神だ』

心を読みやがった! ? それより神様! ?

『そう、神だ、今からお前がどうなったのかを話すから落ち着いて  
聞いてほしい』

『どうやらこの神様は自分がどうなったのかを教えてくれるらしい、  
聞いてみるとよし』

『お前は一度死んだ、そして妖怪に転生するはずだったのだが、  
こちらの方でミスがあつてな、間違えて人間に転生させてしまった  
のだ』

つまり俺は妖怪になるはずだったんだけど、間違えて人間にしてしまった  
と云ふことか。

しかし、なぜ森の中にいるのだろうか?

『本来ならそこで妖怪として転生するはずだったんだよ』

へえそなのが、しかしながら子供の姿なのだろうか。

『それがわからないのだ…、しかもお前はこの様子だと一部だけだ

が、前世の記憶まで残っているようだしな

わからないのかよ…、まあいいや、それよりいくつか質問していいか?

『別にいいぞ』

まず一つ目だ、妖怪とは何だ?

『妖怪とは人間の恐怖から生まれた生物だ、鬼や天狗などいろいろな種類がいる、長生きしている奴ほど妖力が多くて強い、そういう奴は大妖怪と呼ばれているな。』

なるほど、では二つ目、妖力とは?

『妖怪の力だ、妖怪達はそれを使って妖力弾を出したり、妖術を使つたりする。』

へえそうなのか、じゃあ妖怪になるはずだった俺にも妖力があつたりするとか?

『いや見てみたがまったく無いぞ?』

ですよねー

『その代わりにただの人間が持つにしては多すぎるくらいの靈力があるがな…』

おおうまた知らない言葉が、靈力?、何それすごいの?

『人間が持っている力みたいなものだ、持っている量は人間によつて違うが、修行をしたりして増やすことはできる。

靈力弾を出したり、靈力を使って体を強化したりすることができるぞ』

へえ、じゃあ俺にはそんな力がたくさんあるってことだな！  
どうやって靈力弾とか出すのだろうか、後で試してみよう。

『他にも魔力に神力があるがお前にはあまり関係ないだろう、後は能力があるが…』

魔力も神力にも興味があるが、能力ってなんだ？

『能力は人間や妖怪が稀にもつてる力だ、靈力などとは別だな』

へえ、能力を使ってどんなことができるんだ？

『程度の能力といって、能力によってそれぞれ違つ効果を持つて  
いる、  
ちなみに私の能力は考えを司る程度の能力で、私の能力を使ってお  
前に直接私の考えていることを送つてているのだ。』

へえそりなんですか、そんなことよりつ私にも能力とかあるんですかね！？

『口調が変わつてるぞお前…お前に能力があるかどうかだが、ある  
みたいだな』

おおおつ！k t k r！で、どんな能力なんですか！？教えて神様！

『少し落ち着け…私はどんな能力なのかはわからない、ちなみにどんな能力なのかは突然ふつと頭に思い浮かんだり、目を瞑つたりして能力について考えていると文字が頭に思い浮かんでくるらしいぞ?』

そうなのか…よし早速目を瞑つて「おおおおお俺の能力は何ですかあああ!!」

(形を操る程度の能力) (維持を操る程度の能力) この二つかあああ!

『ずいぶん早いな!?』

ふふふ!ずいぶん早いということは俺はすごいということ!..

10秒もたたずに能力が思い浮かぶなんて、俺ったら天才だな!

『(うぜえ…) 落ち着けといってるだろうが…』

うおおお俺はすごいぞーー特別だぞーー!

『…少し黙れ!』

頭痛あー!

『…さて、先ほど話したが、お前は人間の子供となつていてる。それに、この森には人を食べる妖怪達がたくさんいる、油断していたら食べられてしまうぞ?』

妖怪って人食べるんですか!?俺どうすればいいんですかね!?

『お前にはかなりの量の靈力がある、それと能力がある、それらを使つて妖怪たちを倒せ。』

「少し長くはなしすぎたな、私は考えを送るのを終了する、ここからは自分の力で生きていけ。』

あ、ちょっと待つて！…あーいなくなってしまったか、さて、この森の中にはおそらく俺一人だけ、戦い方とかまったくわからないのに、倒せ…か。

「やるしか、ないか…」

俺は一人でそう呟き、大きなため息をつくのであった。

## 2話 精力

さて、いきなり森の中に入ったり妖怪になるはずだつたり能力とか持つてしたりする俺だけどこれからどうするか悩んでます。

悩んだ結果、靈力とかいうのをどうやって使うのかいろいろと試してみることにした。

まず最初に靈力弾を撃つてみよう、手を前に突き出して……やあっ！

…やっぱりというべきか、何も出なかつた。

さて一つ目の手段、能力とやらが目を瞑つて考えていたら出たから、靈力も同じようにすれば出るんじゃね？っていうなんとも安直な考え。

とりあえず座禅を組んで、心を落ち着けて目を瞑つて、体の中の靈力を探すような想像をする。

そうしていると真っ暗な空間に白っぽくもやもやとした物が浮かんでいる、これが靈力かな？

そのもやもやとした物を体の外に出すよつこ……それつ！

…おおっ！…すげえ、体の中からまるで力が出てくるよつだ！…まるでその力が体中にまとわりつくような感じがする。

この状態でなら靈力弾も撃てるんじゃないのか？

そう思いつつ、手を前に出して、この力を手に集めてそこから目の前にある木に向かつて発射！

ポンッ

おおおおおー出たー出た出た！何か靈力っぽいものの塊が出てきた！そしてその塊は木にぶつかって「ドカアーン！」えつ？

…なんと、木の枝が全て跡形も無く消し飛びました。

強すぎたのかなあ？とりあえず同じ木に向かって同じようにして靈力弾を撃つてみる、

発射した靈力はさつきのよいかなり少なくしたつもりだ。  
そしてその靈力弾は木の幹にぶつかった、靈力弾は爆発して、木の幹には手のひらくらいの大きさの穴ができる。

…強いな、とりあえず体の周りの靈力を見てみるが、あまり減つていないようだ。

神様が言つてたとおり、靈力を俺はたくさん持つているらしい。  
しかし油断してはいけない、いくら力があつたつて、使いこなせなければ意味は無いのだ。

さて、次は神様が言つていた方法、靈力で肉体を強化しよう。  
といつてもどうすればいいかわからない、とりあえず、肉体に靈力を流し込んでみよう。

目を瞑つて、靈力を少しづつ体の隅々にいきわたせていく、使つた靈力はさつき撃つた靈力より少し多いくらいだ、  
そしていきわたせた靈力をさつき靈力弾を発射したように…それっ！

おお！？なんだかさつきと比べて体が軽いぞ！？とりあえず全速力で走つてみると、

とてもこんな小さい子供が出せないような速度で走ることができた、うおー！すげー！！

そんなことをしていたらいきなり力が抜けて、速度が落ちていった。どうやら時間制限があるらしい、大体30秒ぐらいか…短いな。

次は能力を使ってみよう、まずは形を操る程度の能力のほうだ。  
形を操るということは、物の形を変えたりできるのかな？横にある木に触つて、

形を変えてみるとある、とつあえず球体にしてみよう。

なんど、さつきまで普通の木の形をしていた木は、田の前で丸まつたりくつたりしてあつといつ間に茶色と緑の大きな球ができましたわ。

こりや面白い、しばらくいろんな形に変えたりして遊んでいました。

次は維持を操る程度の能力を使ってみよう、

：といつてもこの能力はよくわからないのだ、維持することとか、維持をせることができるのか？

何を維持させることができるのかまつたくわからない、…やつこや靈力で肉体を強化できたんだつたな、

その効果が消えないように維持することはできるのか？ひょっと試してみよう。

さつき使った量よりもっとと多くの靈力を使って…「おおおー…?

なななんと！体が軽いとかそういうレベルじゃない！ありえないほどの速さで走ることもできるし、

木をおもいつきり殴つてみたらへし折れてこつちに倒れてきたけど、見てから回避する事だつてできた！

おつと能力を使うことを忘れてた、とつあえず頭の中で『肉体強化を維持する』と考える

そして俺は少し待つことにした。

数十分はたつただろうか、肉体強化が維持されているか試して見よう、とつあえず走つてみると、

さつきとまったく変わらない速度で走ることができた！同じひつて木を殴つたらへし折れたし、

見てから回避することもできた、どうやらじつかり維持されているらしい、他にもどんなのが維持できるのだろうか？

とつあえず変なポーズをして、そのポーズを維持してみた。

なんごつことじょう、体を動かすことができません、これはまずい、『ポーズを維持するのをやめる』！

そうしたら体を動かせるようになつた、ふつよかつた、もしこんな状態で妖怪に襲われて食べられなんかしたら一生の恥だ。

そんなことを考えつつ、俺はいろいろなことを維持したりして実験することにした。

数時間後、いろいろなものを維持させることができるのがわかつた。たとえば速度、歩いている途中で速度を維持した結果、どんな体勢だろうが速度を保つたまま移動した。

ジャンプしたときに速度を保てば空を飛べるかもしれないが、降りるときどうすればいいかわからないので保留。

他にも形など、いろいろなものを維持できるが、説明すると長くなるので後にしよう。

…誰に説明するんだ？そんなことを考えながらソコの辺をぶらついでいる、

そうしてみると何か見えてくる、そこに向かつて歩くと、そこには大きな湖があつた。

「おお……！」

その湖の水はとても綺麗で、魚が泳いでいるのが見えた。

俺はその水に引き寄せられるように湖に近づき、手で水を掬つて飲んだ、おいしい、思わずそんな声を上げた。

俺は湖を覗き込む、そこに見えるのは真っ黒い髪をした子供、…やっぱり、俺は子供になつてしまつたのか、俺はため息をついた、そうしていると後ろから気配を感じる、…妖怪だ、見た目こそ犬の形をしているが、

そいつから得体の知れない力が出ているのを感じる、おそらく妖力とこうやつだわ。

「グオオ！」

「おつと危ない」

妖怪が牙をむき出しにしながら飛び掛ってきたので俺はそれを左に飛んで回避する、そして妖怪の腹を思い切り蹴る、メキイといやな音が聞こえて妖怪は吹っ飛び、その後ピクリとも動かなくなつた。

「意外と弱かつたな……」

正直言うと苦戦するかと思つてたのだが、予想以上に弱かつた。しかし、この妖怪が弱いだけで、他の妖怪たちはもつと強いのかもしない。

もしそんな妖怪と戦うことになつたら苦戦するのは確実、最悪死ぬかもしぬれない。

「もつと強くなる、それが今の目標か……」

そう呟くと腹から音が鳴る、そつこやこの森に生まれてから何も食つてないな。

食べれそなものは…田の前にある妖怪達を見る、意外と食べれるのかもしぬない。

そう思いつつ田の前にある妖怪の首を掴んで、空いた手で腹の毛皮を引きちぎる、…気持ち悪い、

肉をちぎりて口の中に入れる、見た田は悪いが皿いな、そんなことを思いつつ食べ続けた。

残つたのは骨にくつてしまっている肉と毛皮だけだ、とりあえず毛皮を

手と足を使って伸ばして、

その伸びた状態を能力で維持する、肉がある部分に右手をつけて肉の形を変えて剥ぎ取る。

毛皮の肉をすべて剥ぎ取り終わったら近くの木にぶら下げておく、次は骨の形を変えて食器みたいな形にしてみる、骨の皿と茶碗ができた。

そんなことをしていると眠たくなってきた、ここで寝てもいいが、寝ている間に妖怪に襲われるかもしれない、

どうすればいいか考えた結果、近くの木にぶら下げておいた毛皮を下におろし、その木の形を変えて四角い箱にする、

そしてその木の箱の周りにある木を三本ほどへし折り形を変え、四角い箱にくっつけた。

そして大きくなった木の箱の中を空洞にするようなイメージを頭に浮かべ、形を変える、

するどいどうでしょう、その木の箱はどんどん大きくなつていつたではありませんか。

そしてその木の箱の外側に能力で穴を開けて中に入る、だが暗くて何がなんだかまったくわからない、

能力を使って壁に小さな穴をたくさん開ける、これで朝になればこの穴から日光が入る、

火をつかばこんなことをしなくてもいいのだが、

明日試してみるか、そう思いつつ俺は入ってきたときの穴を塞いでその辺に寝転がり、毛皮を自分にかけた。

「おやすみなさい。」

そつ言つて、俺は目を閉じた。

### 3話 妖力、後修行

「うう…ん

目が覚めた、壁にあけた穴から日光が差し込んでくるからか部屋の中は少し明るい。

昨日は暗くて部屋の中がよく見えなかつたが、朝になつたらどうなつているのかがよくわかる、

部屋の中はただ広いだけの空間、あるいは毛皮と骨の食器だけ、俺は壁に大きな穴を開けて外に出る、いい天気だ、湖に近づいて水を骨の茶碗で掬つて飲む、ついでに顔も洗う、そして昨日殺した妖怪の肉を食べた。

俺は今湖から少し離れたところにいる、何をしているかといふと、靈力を使って火を出す練習だ。

これができるようになれば肉を焼くことだってできるし、夜でも明るくすることができる、まあ田を瞑り集中して…ん? かなり近くに妖力を感じる、

こんな朝早くから妖怪が襲つてきたか?  
と思ったがどうも違うらしい、一体なんだと思つたら…なんと、俺の体から出でていました。

「…はあ?」

神様ー俺には妖力無いんじやなかつたんですかねー、とりあえずなぜ俺の体から妖力が出ているのか考えてみた、

もしかして、あの妖怪を食つたのが原因か？そういうや俺は妖怪になるはずだつたんだよな。

じゃあ妖怪を食つたことで俺は妖怪になり始めた？と思つて湖を覗き込んだが、そこに移るのは子供の顔、手や足を見ても何の変化も無い、妖力だけを取り込んだのか？そういうことにしよう。

さて氣を取り直して火を出す練習だ、手を前に出し手のひらを上に向けて、その上に火を浮かべるようにイメージする、そして手のひらに靈力を集め、拡散させるように靈力を出してみる、「ポンッ」… 出てきたのは靈力弾でした、しかも無駄に大きいの。めげずに何度もイメージや方法を変えたりして試してみたけど、出てくるのは靈力弾ばかり、

10回連續で失敗したところであることを思い出す、妖力が俺の体から出てきたことだ。

靈力でなかなかできないのなら、妖力でならもしかしたら楽に行けるんじやないか？と考え、早速実行することにした。だけど、俺は現時点では妖力は少ししか持つていない、少ししか使えないということを考慮して使わなければ。

… そういえば、俺には維持する程度の能力という便利なものがあるんだ、これを使って妖力の量を維持して、減らさずに使うこととかできるのかもしれない、やってみるか。

まずは『妖力の量を維持する』、そして最初に靈力でやつたように手のひらに妖力を集めて拡散させるように妖力を出してみると何となくだけ手に違和感を感じる、

だけど火は出なかつた、こんどはやり方をえて妖力と周りにある空気を混ぜるようにしてみる、

そしてそれをさつきと同じように拡散せるように妖力を出す、す

ると手の上に火が出てきたのだ！

「うわしゃあああああ！火がでたあああああ！」

思わずそんな叫び声がでてしまつくらい嬉しかった、俺は空いている手を火に近づけてみたが、あつたかくない、手で触れてみてもまつたく熱くない、失敗か？そんなことを思いつ試しに足元にある草に妖力でできた火をくつつける、その草はすぐに燃えた、そしてゆっくりと近くの草に燃え広がつていぐ、これはまずい！

俺はダッシュで家に戻り骨の食器を取つてきて、湖の水を掬い火にかけた、それを数回くりかえしてやつと消えた。

危ない危ない…

そういうえば妖力は維持されているのか？確認してみたが普通に減つていた、どうやら維持できないものもあるらしい。とりあえず妖力の維持を解除しておく。

その後は数時間ほど靈力を増やそつと修行っぽいものをしてみた、瞑想してみたり、

座禅を組んでみたり、靈力を使つていろいろなことをしてみたり…そんなことをしていると俺は新しい発見をした、まず靈力を掌に集めて一点に集中させて、

そしてそこから靈力を放出する。

するとそこから靈力の棒みたいなものが出てくる、なんとこの棒に触ることができるのだ。

その棒をもつて、思いつき木に向かつて振り下ろす、すると木がミシイとか音をだして倒れた、

その後すぐに棒は消えてしまった、どうやら使い捨てらしい。俺は棒をまた作り、今度は消えないように能力を使い維持させた、そうしたら何度も木を叩いたりしても消えなくなつた。

さらにこの棒は能力で形を変えたりすることができる、試しに刀みたいな形に変えて折れた木に振り下ろす、すると木が綺麗に真っ二つになった、…なんかかっこいいなこれ。

次は周りに靈力の結界を張つて、一旦身体強化の維持を解除する、そしてその中で腕立て伏せや腹筋をする、いわゆる筋トレだ、だけど子供の体だからなのか数回やつたらすぐ疲れてしまう。

そこで一旦休み、体力が回復したところで能力を使い体力を維持する、そして筋トレをはじめた。

200回ほど連續で続けて少し疲れた、どうやら維持できるものと維持できないもの以外にも

完璧にではないが維持できるものがあるらしい、その後も続けていて、1800回目あたりで続けるのがつらくなつた。体力の維持をやめて地面に寝転がる、もう夕方だ、そんなことを考えているとお腹が減つてくる、

一時間ほど体を休めて立ち上がり、靈力で身体強化した後妖力を隠してあたりをぶらつく、

なぜ隠すかというと妖力を放出していると妖怪が襲つてこないからだ。

ぶらついていると妖怪が襲つてきたので、靈力弾を撃つて一撃で仕留め、仕留めた妖怪の皮を剥ぎ取り、近くにある木の枝を折つて地面に置く。

妖力を使って火をつけて妖怪の肉を焼く、…つん美味しい、生で食べるよりずっと美味い。

食べたら眠くなつてきた、今日はもう寝ることにじよ。

自分の家に戻り、寝転がつて自分に毛皮をかける。

明日は何をしようか、そんなことを考えながら俺は目を瞑つた。

翌日、筋肉痛で一日中家の中に引きこもっていました。

## 4話 名前

この森で生まれてから一年がたつた、その一年の間に何をしていたかというと、

靈力を使つた修行、妖力のコントロール、筋トレ、この三つがメインだ。

その結果、靈力は一年前の2倍ぐらいになり、妖力は10倍ぐらいになつてかなり大きな炎を出せるようになり、身体強化が無くても細い木ならへし折ることができるようになった。

まるで化け物だな、俺は。

ある夕方、俺はご飯を探しに森の中をぶらついていると前方に人影らしきものが見えた、

もしかしたら人間か？期待しながらその方向に走っていく。そこにいたのは人の形をしてはいるが、赤い髪の毛に黄色の目、そして頭に角が生えている妖怪だった。

「ん？人間の子供か、こんなところで何をしている？」

おおう人の言葉をしゃべつた、初めて見たぞこんな妖怪、面白そうだな。

「ちょっと妖怪を探していてね、見つけたら殺して食おうとも思つてるんだ」

あれ？何でこんなことをいつたんだろうか、まあ確かにそつなんだけど。

「何？妖怪を殺す？ハハハ！面白いことを言つ子供だな、陰陽師の

よつなやつらならともかく、

お前のよつな子供にできるはずがあるまい

陰陽師？なんだそれ、すべなくとも平成とかにはそんなの無かつたよな、確か。

「できるんだよなそれが、実際俺はこの森で1年間、妖怪を食つて生きているしね」

「ククク… そりかそりか、ならお前の田の前に妖怪がいるだらう？ そいつを殺して食えばいい、  
ただし… そいつはお前を殺そりとしているけどなあー」

そう言つた後妖怪は俺に向かって殴りかかつてくる、… 好戦的だなあ。

俺はそれを回避して妖怪の横つ腹に向けて足で思いつたり蹴る。妖怪はとつさに腕でガードそれを防いだ。

「グッ… なるほど、どうやら妖怪を殺して食つてゐるといつ葉は嘘ではなかつたようだな。  
とんでもない力だ、こんな蹴りを食らつて生きている妖怪などいらないだろう」

「ふん、その蹴りを耐えておいてよく言つよ

身体強化をしている状態で蹴つたのだ、  
この一撃で終わりにする予定だったのだがまさか耐えるとは、とんでもない化け物だな。

「オラア！」

そんなことを考えていると妖怪が顔面に向けて突きを出してくる。

「おおつと危ない…痛つ」

どうやら回避しきれなかつたらしい、頬に何か暖かいものが流れていぐを感じる。

それを好機とみたか、妖怪が右、左と一気に腕を突き出してくる。

「わらわらわらわらわらわーーー！」

俺はそれを全て回避して左手で妖怪の腕を掴み、地面に向かつて思い切り叩きつける。

「グアアア！」

「一気にいくぜーーー！」

俺は空いている右手で背中を殴り、その次には左手を離して足で蹴飛ばす、

妖怪は叫び声を上げながら飛んでいくが俺の攻撃はまだ終了していない、

俺は全力で地面を蹴つて飛び、飛んでいった妖怪に追いつく、そして右手に靈力を込めて妖怪の腹に向けて正拳突きを決める。

妖怪はわっさきの倍近いスピードで木をへし折りながら飛んで行つた。

…やりすぎただろつか、生きているか心配しながら妖怪が飛んでいった方向へと走る、  
飛ばされた妖怪は仰向けになつてぶつ倒れていた、どうやら氣絶してこるらしい。

…あれだけやつて氣絶しているだけとま、こいつの体が死なつてやがる。

とりあえずこいつを家に運び、毛皮で作った布団に寝かせてその上に毛皮をかけておく。

俺は寝転がつて頬杖を付きながら妖怪が起きるのを待つことにした、あれ？

頬の傷がなくなつている？俺はこの妖怪に頬に傷をつけられてから5分もたつてないぞ？

さすがに傷がこんなに早く完治するのはおかしい。

「うう…」

「あ、田が覚めたようだな」

そんなことを考えていると妖怪が起き上がつた、妖怪は辺りを見回している。

「…！」

「俺の家だ、お前が氣絶したから家に運んだんだよ」

「…なぜ殺さなかつた？俺が人間と同じような姿をしているからか？」

「ん？ 妖怪を食つとはこいつたけど別にお前に向けて言つた覚えはないぞ？」

お前角があつてあんま美味しくなれただし、もつと美味しいそうな妖怪もいたし

そういうつてやると妖怪は呆れたような顔でこいつを見た、とこうか

実際美味しくなさそうです。

「お前そんな理由で…まあいい、それより聞きたいことがあるんだが、なぜお前はそんなに強いんだ?」

「毎日腕立て伏せ1000回腹筋2000回ぐらいやって、靈力を使った修行をして、妖力をコントロールできるように努力した結果だな。」

「…化け物が、一体どんな体をしていやがる」

お前が言つた。

「やういえば聞いてないことがあった、お前の名前は何だ?」

名前? そういうえばそんなものありましたね。いや一年間誰とも話したこと名前のことなんてすっかり忘れちまうのよ。そうだ、こいつにつけてもらひ、自分でつけてもいいけど、妖怪につけてもらひの面白い。

「名前…ないよ、俺には名前はないんだ、そうだ、お前が俺に名前をつけてくれないかな?」

「名前がない? それより、俺が名前をつけてもいいのか?」

「俺がつけてくれといってるんだからいいに決まってるだろ? 酷あざるのは却下するけど」

そうじつてやると妖怪は顎に手を当てて口を開じ、一人でぶつぶつ言い始めた。

やうしてじょがらへたつとまた田を開け、口を開いた。

「 わうだな……殴碎<sup>おうさい</sup>、なんてどうだ？殴るに碎く、それで殴碎だ。」

殴碎……なんとも安直な名前だな、まあいいか。

「 ああわかった、じゃあ俺の名前は殴碎だ。わうえば、お前の名前は何だ？」

「俺か？俺の名前は龍鬼だ」

「 そりか、じゃあこれからお前のことを龍鬼と呼<sup>よ</sup>ばせ<sup>ま</sup>せりやねり、龍鬼は俺のことを殴碎と呼んでくれ」

「ああ、わかつたよ殴碎……さて、俺は帰るとするか」

「ん、帰るのか、またな龍鬼、俺は大抵この湖の近くにいるから、たまに遊びに来てくれ」

「 わうせてもうわ、じゃあな殴碎……」

そつこつと龍鬼は走つてどこかに消えてしまつた、しかし面白い妖怪だ、あんな妖怪始めてみたよ。今度会うときが楽しみだ。れて、お外はもう真つ暗だ、寝ることにしますかね。

「 おやすみなさい。」

俺はそつこつと布団の中に潜りこみ、田を開いた。

翌日、朝っぱらから龍鬼がやつてきて勝負を挑んできた。

龍鬼とあつてから十年がたつた、俺の体は成長してすっかり大きくなってしまった。

ちなみにその十年間何をしていたかといつと、龍鬼と勝負したり、修行したり、龍鬼と勝負したり、龍鬼と雑談したり、龍鬼と勝負したりしていた。

そう、あの出来事で龍鬼と会つてからほぼ毎日のよつに龍鬼が勝負を挑んでくるのだ。

しかもこいつ、俺と戦うたびに強くなってるのである。

俺の攻撃を見切つてカウンターを入れようとしてしたり、妖力弾を使つて俺の動きを制限してきたり…

ちなみに戦績は2543戦中2543勝0敗、全勝である。なぜ毎日のように戦うのか龍鬼に聞いてみると。

「ああ、ただの暇つぶしだ、お前も暇そだしちょうどいいだろうなんてふざけたことを抜かしやがりました。

まあ実際暇だし、龍鬼と戦うのは結構楽しいので文句は言つてない、龍鬼の目の前ではだが。

そうそう、俺の能力について新しいことがわかつたのだ。

ある戦いで俺が龍鬼の妖力をこめた攻撃を耐え切れなくて、左手の骨を折つてしまつたのだ。その後龍鬼にはカウンターを決めて氣絶させて家に運んだ。

そして家に戻るとあることに気づいた、なんと、折れていたはずの左手が少し痛むが普通に動かせるようになったのだ。

そのことを龍鬼に話すと龍鬼は少し考えるようなそぶりを見せて、

ちょっと左手を貸してみるといったてきた。

龍鬼に左手を貸してみるとなんと龍鬼は俺の左手をひねってねじ切りやがったのです、

それはもう想像を絶する程の痛みが俺を襲つて、俺は龍鬼に向かってなぜこんなことをするのかと怒鳴つたのだ。

しかし龍鬼は返事をせずに驚いたような、そしてどこか納得したような表情で俺を見ていた、

思わず俺は右手で龍鬼に殴りかかるとしたが自分の体の異変に気づく、左肩の部分が何かむず痒かったのだ、

俺は左肩を見ると、そこからとんでもないスピードで腕が再生していたのだ。そして数秒後腕は完治していた、あの時はほんと驚いたね。

俺は龍鬼に向かって聞いてみたら、龍鬼曰く

「おそらくお前の維持操る程度の能力とやらが働いて、何か体の部位に関係あることを維持してるんだと思う」

ところが返ってきた、なるほど、俺の能力が勝手に何かを維持しているのか？ふーむ、体に関係あるといひえば、五体満足、とかか？または原型とか。

原型を維持するのなら俺の体も成長しないはずだから、おれらぐ五体満足とかあたりだろう、うん。

その後龍鬼の顔を一発ぶん殴つておいた。わかりやすいが、口で説明してもよかつただろうが。

余談だが、龍鬼は俺のところに遊びに来るときに偶にお土産を持ってきてくれる、

例えば俺が大きくなつたときには服を持ってくれたのだ、あの時は本当にありがたかつた。少し裾が破れていたり、血が付いていたりしていたが。

他にもキノコとか、肉とか、野菜とかをもってきててくれた、持つて

きた食料はみんな俺が調理して食べている。

キノコは毒キノコで、野菜は腐っていたが。

しかも肉は人肉だったし、ちなみにとても美味しかったです、今度食つたら中毒になりそうなくらい。」。

それから龍鬼が持つてきた肉は龍鬼が何と言おうと食わずに捨てることにした。

そんなこんなで十年たつたある日の俺、「龍鬼が突然こんなことを言つてきた。

「俺、この森を出る」と云ふ

「ん、そうか、じゃあいつてらっしゃい」

「…少しは理由くらい聞けよ」

「理由といつてもなあ、どうせお前のことだし暇だからとかそういう理由だらう?」

俺と毎日戦う理由が「暇だから」なんてこいつちやう奴である、どうせこんな毎日に飽きてきたのだろう。

「まあ実際そつなんだが、一応他にも理由はあるんだ」

「もつと強くなるとかか?それとも強い奴に会いに行くとかか?」

とつあえず旅に出るためにあつそつな理由を適当に挙げてみる。

「…その両方だ」

おお当たつた、しかし「の森を出るか、そんなこと考えた」とも無かつたな。

「そういえば」の森の外はどうなつていいのだろうか？…なんだろう、なんだか興味がわいてきたれ。

龍鬼がいなくなつたらまた暇になるだろうし、森の中でもた龍鬼のよつな妖怪と会える可能性は非常に低い、そんなことをして森の中で一生くらしてこより、他の場所ですごしたほうが楽しいかもしない。そう考へると俺もここを出て、いろいろなところを旅したりしたほうが面白いくかもしない。

「…じつした？ 疾碎、なんだか顔が一いやついているだも？」

「…決めた、俺も」の森を出る」とひくわ

「…いきなりだな、まあお前のことだ、じつせ森の外に興味でもわいたのだろう？」

「なぜばれたし、まあいいや、とりあえず俺は明日の朝、この森を出る」とひくわ

「やうが、俺は今日の夜あたりに出るつもりだ、…さて、出る前の準備もある、俺は帰らせてもいい」

「わかつた、じゃーな龍鬼、また会えたらいな」

「クク、また会えたらい、ではなくて、また会おう、だろ？…

「じゃあな、疾碎」

そういつて龍鬼は森の中に消えていった、…また会おう、か、人間の寿命は長く生きて百程度。

その短い間にまた会えるかねえ。まあいいや。さて、俺もこの森を  
出る準備でもしますかね。

「さて、今日でこの湖ともお別れか」

そう言つて俺は歩き始めた、背中には龍鬼が持つてきた服の一つを  
使って作った大きなリュック、

その中には木で作った水筒と弁当、それと骨の食器と毛皮が入つて  
いる。

とりあえず一直線に向かつて歩き続ければ外に出るだらうと思  
つて俺は歩き続けた。

一時間ほど歩き��けてみると整備されてゐるような道路を見つけた  
のでそれに沿つて歩く、

歩き続けていると森の中から出ることことができた、森を出てからもし  
ばらくの間進んでいくとなにやら前のほうに複数の人影が見える、  
……ん？なんだかこっちに向かつてきてないか？

とりあえず俺は人影があるところに歩いてみる、だんだん田で見え  
るようになつてくる。

その人達は刀や棍棒らしき物を持っていた、そいつらの一人が口を  
一ヤつかせながらこつこつと歩いてくる。

「よつ、セイの兄ひやん、ちょっとこちあきてくれねえかな？」

「……何だ？」

「まあいいからこちあきはねづくつと近づいてくる、……こわゆる山賊

そう言つてそこからはずむくつと近づいてくる、……こわゆる山賊

つて奴らか。

俺はそいつらの一人に向かつて一瞬で近づき、少し手加減して腹を殴る、殴られたそいつは少し吹っ飛んで倒れたまま動かない。

「なー? 手前なにを「ふんつ!」じびやつ!?」

何かを言おうとしている奴にアッパー・カットを決める、そして棍棒を奪い取つて他の奴らに頭に一発ずつぶち込む、そして一人だけを残しておいて、その一人の胸倉をつかんで上に持ち上げる。

「はい、来ましたよ? で、こんな旅人に何の御用でしょうか?」

「た、た、助けてくれ! 俺はまだ死にたくない! お願いだ! 金でも何でも渡すから!」

死にたくないとは失礼な、俺がこんなやつらを殺したとでも思つているのか。全員気絶させただけだというのに。まあいや、とりあえず金と、近くに村とかでもないか聞いてみよう。

「おおー! このような私にお金をくださるというのですか! なんて優しい方々なのでしょう、では今もつてているお金の一部と、持つている刀を一本いただくとしましょう

「わ、わかった! 渡すよ! だから離してくれ!」

「ああそうだ、この近くに村や町はありませんか?」

「ー、この道をずっとまっすぐ行くと平城京とかいう都があるんだ、

そこにはたくさん人がいたはずだ。な？もういいだろ？離してくれよ

よ

平城京？確かに奈良時代の都だったかな、となると今は奈良時代といつたところか？

とりあえず山賊を放して刀と鞘とそれなりの金額らしいお金をもらつた。刀は片手に持つて、お金はリュックの中に入れておく。確かにこの時代のお金つて銅貨だったはずだが、まあ気にしないことにしよう。

山賊は渡すものを渡したら「この外道が！」とかほざいてどこかに走つていってしまつた。

とりあえず山賊が言つていたとおりにまっすぐ歩いていく、そうしていると何か人がたくさんいるところについた、おやらぐ、ここが平城京だろう。

とりあえずそいつをぶらついてみると、…周りの人々の視線が痛いな。

まあ片手に刀を持つてぶらついている人なんてほとんどいないだろうし、仕方が無い。

「おー、そこのお前、そこで何をしてる？」

なんだか偉そうな服装をしている人に話しかけられた。

「私は旅の者です。旅をしてる途中で町は無いかとね…じゃなくて人に尋ねてみたところ、  
都があると聞き、ここまで歩いてきたのです」

「本当か？」

「本当ですとも」

「まあいい、あまり騒ぎになるようなことはするなよ」

「はい、わかりました」

そうこうと偉そうな服装をしている人はさつさと立ち去つていった、感じ悪いなあ、そう思いつつ俺は近くにあった茶屋に入つて金を渡して団子とお茶を頼む。

「… わたし、これからどうするかね」

「… 一年位暮らしてみるか？ でも住む場所が無い。いや、家は都の近くにでも自分で作ればいいじゃないか、というわけで一つ解決、次は金だ。

妖怪を食べて生きていけば別に問題は無いけど、それじゃあ森ですんでいたときと何にもかわりやあしない。といつか妖怪以外のものをもつと食べたい。さすがに飽きた。

金を稼ぐには… そりだな、妖怪でも退治して、その報酬で金でも稼いでみるか？ うん、そうしよう。そう考えて立ち上がりつつとすると店の人呼び止められる。

「お姉さん、団子食べないんですか？」

といつあえず、食べてから行くとしようか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6019y/>

---

東方維形錄

2011年12月1日19時50分発行